

BOOK Review

在宅医療カレッジ 地域共生社会を支える多職種の学び21講

評者 高橋 昌克 釜石のぞみ病院医師

本書の編者は、東京を中心として在宅医療ネットワークを提供する医療法人社団のリーダーであり、かつウェブ上で全国の在宅ケアに関わる多種多様な人たちとの学びと意見交換の場「在宅医療カレッジ」を主催・提供している奇特人である。

その一連の講義シリーズの内容をダイジェスト版として編集されたのが、この一冊である。刊行と同時にAmazon医書ランキングで2018年の歳末から19年年初のベストセラーとなったので、目に留められた方もおられるだろう。

本書はⅢ部構成となっている。第Ⅰ部「認知症ケアの学び」では、近未来のわが国では高齢者の4割が認知症・軽度認知障害になるというシミュレーションデータ(p.7, 木之下徹講義)が大前提として呈示されており、あらためて衝撃を受ける。しかし「認知症になったらおしまい」ではなく、患者が持っている能力を生かして健常者と共に地域の一員として多様な社会をつくる必要と希望があることを、現場の実践家が熱心に説いている。また、疾患当事者(レビー小体型認知症・若年性アルツハイマー型認知症)も本書の講師として、その貴重な体験を語られている。「おまえが忘れても、俺たちが覚えていてから」(p.57, 丹野智文講義)と地域の友人から励まされたという言葉が、認知症サポーターが進むべき発想の転換を示している。

第Ⅱ部「高齢者ケアの学び」では、高齢者のサルコペニア、フレイル、そこから生じる肺炎などの予防も注目を集めるようになった現代の進歩がよくわかる。多くの高齢者がそれぞれに多重併発した疾患の治療を受けるため、ポリファーマシーの問題が生まれていること(秋下雅弘・平井

みどり講義)も見逃せない。さらに栄養指導には口腔ケア、リハビリテーションの併用で、高齢者の笑いのある生活が延びることが各章で述べられている。さらに、長い老後の生活に欠かせない車いすシーティングの可能性(山崎泰広講義)も注目である。医療者にできる新たな思いが湧き上がり、自身も行動したくなる。

第Ⅲ部「地域共生社会の学び」では、寿命が延び、長い老いの時間を迎えなければならないこれからの日本人に必須の知識が語られている。これからの高齢者は支援されるだけでなく、自らの持つ能力を地域のために役立て、共に生きる社会をめざすべき存在であること。循環型の在宅ケアを利用しつつ、医療の世話になる疾患が進行したなら入院し、かつ医療者はその方の「人生を遮断」(p.202, 宇都宮宏子講義)しないケア提供を目標として退院支援する。死が近づいて来たら、スピリチュアリティを基盤とした在宅ホスピスケアを受けることも視野に入れる——。その先駆的実証例として、夕張市の医療再建が、在宅医療が地域医療の担い手であることを証明したことも述べられている。

また、本書に地域共生社会の実現に向けてそれぞれ尽力した西村元一と村上智彦、二人の医師の事績が紹介されている。共にがん当事者となり50代で早逝されたが、最後まで無数のがん患者支援のために、命を削って行動し続けられていた。

本書は在宅医療を見通す小さな窓のような本である。この窓から、多くの読者に現代の医療者に必要な新たな在宅ケアの気付きを得てほしい。編者に感謝するとともに、続編を切に希望している。



佐々木 淳 編

A5判/264頁/2018年/定価(本体2,000円+税)/ISBN978-4-260-03823-2/医学書院刊